

羅馬書の研究

内村鑑三著



『羅馬書の研究』に附する序

余に一生の志望があつた。それは日本全國に向つてキリストの十字架の福音を説かんことであつた。この志望は、余が明治の十一年、札幌において初めてキリストを信ぜしときに起つたものである。爾来星霜四十年、その實現の機会を待つも到らず、時にあるいは志望は夢として消ゆるのではあるまいかと思うた。

されども機會はついに到来した。神は余のために所を備えたもうた。それは東京市の中央、内務省正門前、近くに宮城を千代田の丘に仰ぐところ、大日本私立衛生會の講堂であつた。余は此所に、大正八年五月より同十二年六月まで、滿四年にわたり、日曜日ごとに聖書を講ずるの自由をゆるされた。建物はドイツ式の宏壮なるもの、設備完全にして、震災以前の東京市において、他に得る能わざるものであつた。聴衆はすべての階級を網羅し、キリスト教各派の信者、教會以外の信者、またみずから信者と稱せざる者、また仏教の僧侶さえもそのうちに見た。實に日本にキリスト教が傳えられて以来、未だかつて見たことのない聴衆であつたと思う。その熱心に至つては、彼らのうちに、あるいは宇都宮より、あるいは名古屋より、毎回列席せる者ありしに徴しても判明^{わか}る。余自身にとりては、余の生涯の最高潮に達したときであつて、五十九歳より六十三歳に至るまでの間、この樂しき事業に従事するを得て、感謝この上なしである。

余は大手町において、ダニエル書、ヨブ記、ロマ書、ならびに共觀福音書の一部を講じた。そのうち余がもつとも深く興味を感じしものはロマ書であつた。使徒パウロによつて口授せられしこの書は、キリスト教の眞髓を

傳うる書である。この書を解せずして、キリスト教を解することはできない。また余の四十七年間の信仰の生涯において、余がもつとも注意して研究したりと思うはこの書である。余はロマ書を講じて、實は余自身の信仰を語つたのである。ゆえに六十回にわたりしこの講義は、余にとりては快樂の連続であつた。これを百回または二百回となすも、余は倦怠をおぼえなかつたであらう。神の思惑の福音の講述である。キリストにあらわれたる天父の愛の宣傳である。これにまさる愉快たのしみの、他にありようはずはない。余は第六十回の最後の講義をなし終つたときに、惜別の涙を禁じ得なかつた。

著者なる余自身が、この書の不完全をもつとも痛切に感ずる者である。余は編纂者とともに最善をつくしたつもりであるが、その結果たる、理想に遠くおよばざるを遺憾とする。「われらこの寶たからを瓦器つちのうつわに持てり」とあるがごとく、パウロの遺せし本文は寶玉であるが、我らがこれに與えし註釋は瓦器にすぎない（コリント後書四章七節）。ただし器は無きにまさるべし。あえてこれを世に提供する所以である。

余はここに、過去六年のあいだ余の講演の席につらなり、直接に間接にこの聖業に参加せられし多数の聴講者諸君に、心よりの敬愛を表す。また藤井君、黒崎幸吉君、時田大一君、畔上賢造君ら、余と講壇を共にせられし諸君に感謝す。またその音楽的天才をもつて、會衆一同を讚美の歌に導かれし故吉澤重夫君の好意を記念す。ことにまた聴講者の一人なる古我貞周君が、本書出版の費用を負担せられしを感謝す。人生は短し、眞理は永し、我らこの短き生涯において、幾分なりとも神の福音の眞理のために努力して、その永久性の分與にあずかりしことを感ぜざるを得ない。願わくは、榮光かぎりなく聖靈により、イエス・キリストの御父なる眞の神に帰せんこ

とを。

大正十三年（一九二四年）七月五日

内村鑑三

私には一生をかけた志があった。それは、日本全国の人々にキリストの十字架の福音を説くことであった。この志は、明治十一年、私が札幌で初めてキリストを信じた時に芽生えたものである。以来四十年という長い歲月、その実現の機会を待ったが訪れず、時には志が夢として消えるのではないかとも思った。

しかし、ついに機会は到来した。神が私のために場所を用意してくださったのだ。それは、東京市の中央、内務省の正門前、近くに皇居を千代田の丘に仰ぐ場所にある、大日本私立衛生会の講堂であった。私はこの場所で、大正八年五月から大正十二年六月まで、丸四年にわたり、日曜日ごとに聖書を講義する自由を与えられた。建物はドイツ式の壮大なもので、設備も完璧であり、震災以前の東京市では他に類を見ないものであった。聴衆はあらゆる階層を網羅しており、キリスト教各派の信者、教会以外の信者、信者と自称しない人々、さらには仏教の僧侶まで見受けられた。本当に日本にキリスト教が伝わって以来、かつて見たことのない聴衆であったと思う。その熱心さは、彼らの中に、宇都宮や名古屋から毎回出席する者がいたことから明らかだ。私自身にとつては、生涯の最高潮に達した時であり、五十九歳から六十三歳までの間、この楽しい事業に従事できたことは、感謝してもしきれない。

私は大手町で、ダニエル書、ヨブ記、ローマ書、そして共観福音書の一部を講義した。その中で私が最も深く興味を覚えたのはローマ書であった。使徒パウロによって口述されたこの書は、キリスト教の真髄を伝える書物

である。この書を理解せずして、キリスト教を理解することはできない。また、私の四十七年間の信仰生活において、私が最も注意して研究したと思うのもこの書である。私はローマ書を講義して、実際には私自身の信仰を語ったのだ。ゆえに、六十回にわたったこの講義は、私にとって快楽の連続であった。これを百回、あるいは二百回にしたとしても、私は倦怠を感じなかったであろう。神の思いやりによる福音の講述である。キリストに現れた天の父の愛を伝えることである。これに勝る楽しみが、他にあるはずはない。私は第六十回の最後の講義を終えた時、別れを惜しむ涙を禁じ得なかった。

著者である私自身が、この書の不完全さを最も痛切に感じている。私は編纂者と共に最善を尽くしたつもりだが、その結果が理想に遠く及ばないことを残念に思う。「私たちはこの宝を土の器に入れています」とあるように、パウロが残した本文は宝石だが、私たちがこれに与えた注釈は土の器にすぎない（コリント後書四章七節）。ただし、器は無いよりはましであろう。あえてこれを世に提供するのはそのためである。

私はここに、過去六年間、私の講演の席に出席し、直接的、間接的にこの聖なる事業に参加して下さった多数の聴講者の皆さんに、心からの敬意と愛情を表す。また、藤井君、黒崎幸吉君、時田大一君、畔上賢造君ら、私と講壇を共にして下さった皆さんに感謝する。また、その音楽的才能で、聴衆一同を賛美歌へと導いて下さった故吉澤重夫君の好意を記憶にとどめる。とりわけ、聴講者の一人である古我貞周君が、本書の出版費用を負担して下さったことに感謝する。人生は短い、真理は永遠である。私たちはこの短い生涯において、わずかでも神の福音の真理のために努力し、その永遠性にあずかることができたと感じざるを得ない。願わくは、限り

ない栄光が聖霊によって、イエス・キリストの父である真の神に帰されることを。

大正十三年（一九二四年）七月五日

内村鑑三

羅馬書の研究

大正十年二月十日—十一年十一月十日

『聖書之研究』二四七—二六八號

署名 内村鑑三 講述 畔上賢造 編纂

本稿は内村の東京講演を基本として畔上が自己の研究をも加へて編纂したるもの、或意味に於て二人の共作と云ふべきものである。

第一講　羅馬書の大意（一月十六日）

基督教の經典は云ふまでもなく新約聖書である、勿論舊約聖書をも加へて創世記より默示録に至るまでに於て神の道の啓示は完（まこと）うせられたのである故、基督信者の據（よ）るべき經典は舊新約兩書であるが、嚴密の意味に於て基督教の經典と云ふべきは新約聖書である、何となれば基督教そのものは其完き形に於てはキリストの出現を以て始まつたものであるからである、而して此新約聖書は其分量に於ては決して謂ゆる大著述と稱せらるべきものではない、五號活字を以て四六判に組み立て僅かに數百頁に亘るに過ぎない、之を佛教の經典たる大藏經に比するに其分量に於ては小屋を以て大厦（たいいか）に比するも尚足りない、又これを回教の經典たるコーランに比するも尚ほ其半量（なかば）たるに過ぎない、其大さより云ふて寔に一小著である、然るに此一小著中に、全世界を幾度も改造したる歴史を有し尚ほ將來も然する力（ちから）を具備せる一書の含まるゝは、眞に奇跡中の奇跡であると云はねばならぬ、この一書こそ實に我等の今回の研究の題目たる羅馬書である。

實に聖書は寶の庫（くら）である、其中に取て以て我等の心靈の糧とすべきものは限りなく在る、從つて我らは研究すべき題目の少きに苦まらずして却て多きに苦むのである、しかし乍ら福音の中心たる十字架即ち贖罪問題について研究せんとする時は、この問題に關して徹底的説明を提供したる羅馬書を採るを最上の道とすること勿論である。

イエスは其公生涯の終に當つて自己の死を弟子等に豫示し給ふた、馬太傳第十六章二十一節に言ふ「此時よりイエス其弟子に己のエルサレムに往きて長老、祭司の長、學者たちより多くの苦しみを受け且殺され三日目に甦

るなど爲すべき事を示し始む」と、こは最後のガリラヤ巡回中に於ける事であつた、それを引き止めたるペテロは「サタン」と呼ばれて斥けられた、主は動かすべからざる決意を以て自ら死を選び給ふたのであつた、何の故の死ぞ、何故彼は出来るだけ長く地上に住みて衆民濟度の聖業に従はんとせぬのであるか、寔に怪むべきの至りである、イエスはガリラヤに於て此事を繰返して弟子等に語りしと見え 十七章廿二、三節も同一の事を記してゐる、彼はエルサレムに上る途中に於て復た此事を彼等に告げた（二十章十七より十九迄）、そして茲に初めて自己の死の決心の意味を語つた、「此の如く人の子の來るも人を使ふためには非ず却て人に使はれ又多くの人に代りて生命を與え其贖ひとならんためなり」と（二十章二十八）、そして弟子と最後の過越節（すけしのはひ）を守りし時に「汝等みな此杯より飲め、これ新約の我血にして罪を赦さん」とて多くの人のために流す所のものなり」と告げ給ふた、果然彼の死の決意は萬民の罪を自己一身に擔ひ、彼等に代りて自己の生命を與へて其贖ひとなり、以て彼らの罪の赦を獲んとするにあつた、實に是れ彼の永久に人類全體を包む大愛の發動であつた。

イエスは其言を果して十字架上に其尚ほ壯なる生命を献げた、弟子は失望と恐怖に逃れ去つた、しかしイエスは墓と死に閉ぢこめらるべき者ではなかつた、父は彼を復活せしめた、そして昇天せしめた、茲に於て弟子の間に力ある信仰が勃然として起つた、彼等は主の生前の教を想起した、そして之と相照して其十字架と復活とを眺めた、かくて彼等は先づイエスの神性を明かに信じた、それに合せて十字架の贖罪を信じた、それに合せて主の再臨を信じた、かくして基督教は成り、かくして其世界的宣傳は開始せられた。

我等概エスの贖罪の死の豫示と己の罪の赦免の切望とを以て十字架を見る時贖罪の信仰は生起する、十二使徒

等はそれであつた、併し彼らは單純朴實の民であつて理論の上に其信仰を説明しやうとは企てなかつた、茲に神は敵人の中より使徒パウロを起し給ふた、彼は痛切なる赦罪の實驗と深奥なる贖罪の理論とを兼ね有した人であつた、多分彼は此事について父の默示に接せんと欲して幾年かを曠野に彷徨したことであらう、遂に彼は血と涙とを以て贖罪の實驗と其理論とを兼ね獲るに至つた、父は彼に之を示し、彼はイエスの十字架に理論的根柢を與へた、羅馬書は即ち贖罪の理論的根柢を開示せる大著である。

再臨は貴き希望である、併し十字架を除きし再臨の希望は害多くして益少ない、人は十字架を信ぜずしては、又は十字架について淺き信仰に止まる限りは再臨を信ずるも健全なるを得ない、げに基督教の特色は再臨に存せずして十字架に存する、勿論基督教の再臨及びそれに伴ふ世の終末と改造との内的性質が他の宗教の之と相似たるものと比して、全く比較し難き高處に立つは事實である、さはれ其事は他の宗教にも之に似たる教義の存する事を否定するを得ない、例へばかの大本教の如きは謂ゆる終末教であつて、近き將來における世界の壊敗と改造とを主張するものである、故に我等の再臨唱道が往々にして斯かる宗教を信ぜる人の同感賛成を得て、基督教の淺き見方を惹起せしは遺憾の至りである、再臨の希望は贖罪の土臺の上に築かれて初めて健全なるのである、後者を除きたる前者は沙の上に建てられたる家の如くである、雨降り大水出で風吹きて其家を撞てば、終に倒れて、其傾覆大である、否雨降らず風吹かざるに其家は倒れ去るのである。

基督教の專有的教義は贖罪である、もとより罪の赦免は佛教にもある、淨土眞宗の如きは之を以て生命とせる宗教である、さはれ彼になくして我にあるものは實にキリストの十字架である、如何なる宗教か其教祖の死の上

に赦罪の信仰を立脚せしむるものがあるか、唯の赦罪の信仰ではない、實にイエスキリストの贖罪による赦罪の信仰である、これ基督教の特有物にして福音の福音たる所以また實に茲に存するのである、故に今日此信仰を提唱するは基督教を他の宗教と截別せしむる効果あると共に、近時唱道せらるゝ贖罪拔きの基督教と我らの信ずる基督教との相違を明らかにしむる最も有力なる道である、此意味に於て羅馬書の研究は頗る有價值であると云はねばならぬ。

人は往々にして羅馬書を以て難解の書となし、此意味に於て新約聖書中これを默示録と併置する、默示録は記事そのものが不可解であり、羅馬書は其中に貴き語は散見すれど全體として解し難しと云はれて居る、果して此書は然く難解のものであらうか、先づ注意すべきは其分量の至極小なる事である、章に分ちて十六、節に分ちて四百三十三、字の數は希臘原文に於て約七千字、英譯に於て約八千字、日本譯に於て約一萬六千字（假名一字に數へて）である、これを『聖書之研究』誌上に印刷すれば僅かに二十頁を以て事足るのである、又之を通讀するには四十分を以て足ると思ふ、到底一時間を越ゆる事はないであらう、幾度も世界を改造せし書と稱せらるゝも其分量の小なること寔に驚くべきである、故に之を難解なりとするも其小冊子たるを思へば、之が研究に従はんと勇氣は自ら生起せざるを得ないのである、もし此書を一つの要塞に譬へんか、もとより堅壘たるには相違なけれど、決して難攻不落と云ふべき程のものではあるまい、攻むるに道を以てすれば此堅壘も亦陷落するのである、要は我等の熱心如何に存する、而して此要塞が堅固なりと雖も必しも大ならざるは之を攻略せんとする我等に取り勿計の幸である、記せよ十六章、四百三十三節、一萬六千字、難しと雖も僅かに一萬六千字を以て成る一

文章たるに過ぎない。

由來貴重なる書物は之を讀むのみに止めずして筆寫を以て理解を助くるを最良の方法とする、我らの祖先に佛教に熱心なる信者多かりしは周知の事實なるが、彼等が熱心に經文を筆寫したる一事は今人の遠く及ばざる事である、法華經を全部筆寫したる人の如きは數へ得ぬ程多數であつたと思ふ、かの宗教改革に於て貴く重き責を充たしたるメランクトンは羅馬書を二回筆寫したとの事にて、それが西洋に於て珍しき事として傳へられて居る、併し之を日本の佛教史に持ち來れば少しも珍しき事でなく全く普通の事である、羅馬書の如き貴重にして且平易ならざる書は宜しく之を筆寫すべきである、然る時は唯の通讀に比して理解の上に恐らくは十倍もの力を與へる事であらう。

英の詩人にして且文學批評の天才なりしコレリツヂは羅馬書を稱して「世界最大の書」と呼んだ、げに人間の筆に成りしものゝ中これ程の大著作はないのである、此書ありしたため地球の表面は幾度も改造せられたのである、もし此書なかりせば如何、我等は果して今見る如き世界を見得るであらうか、此書のために起されし幾度かの世界改造なかりしとせば、我等は尚心靈束縛の幽くき境に呻吟しつゝあるであらう、オーガスチンの羅馬教なく、ルーテルのプロテスタント教なく、クロムウェルの清教徒改革なくウヲシントンの米國建設なき時世界は今果して如何の状態にあるであらうか、我等は今その様を想像に上すことすら出来ない、併し恐らくは今日に比し猶遙かに惡き世界に我等は住むに相違ないと思ふ。

今や世界改造の聲は地の果より果に到るまで鳴り轟いてゐる、改造は人間生活の各方面に向つて叫ばれつゝあ

る、併し乍ら今日の改造説は未だ一度も實地に試みられざるもの、従つて其どよめきは如何に大なるも其效能の明かならぬものである事は否定し得られない、然るに羅馬書の提示する改造の原理は、曾て幾度か試みられて其効果の顯著なるを證據だてられし者である、且今日流行の改造説は唯社會の外部的制度に關する者であるが、羅馬書の改造説は自己心靈の改造を主眼とする者である、而して外の改造と内の改造と孰れが源にして孰れが未なるかは識者を俟たずして明である、故に羅馬書の提供する改造の原理は今日流行のそれに比して、遙かに深奥なるものなることは云はずして明である、外か内か、形か心か、肉か靈か、我等は前者の一を以て後者の一の上に置かねばならぬ 而して古往今來人の道は概ね外と形と肉とに重きを置き、神の道は永へに内と心と靈とに重きを置く、而して羅馬書の改造説は神の道である、故に今日流行の人の道たる幾多の改造説と正反對の極に立つものである、さりながら問題は孰れが眞正の改造説なるかに存するのである、さりながら問題は孰れが眞正の改造説なるかに存するのである、寔に然うである。

今羅馬書の中より二三の有名なる語を摘出して、それが右の如き意味に於ける改造の原理たる事を示すことにしよう、第一は一章十六、十七節である。

我は福音を耻とせず、此福音はユダヤ人を始めギリシヤ人すべて信ずる者を救はんとの神の大能たればなり、神の義は之に顯はれて信仰より信仰に至れり、錄して義人は信仰に由りて生くべしと有るが如し。

是れ多くの註解者によりて羅馬書の主題と見らるゝる重要な語であつて、羅馬書全體を壓搾せしが如きものである、時は千五百十一年の某月某日のことであつた、かの北歐の剛健兒マルチン・ルーテルは其屬する宗派の

使命を帶びて羅馬府に使した、時に彼は三十歳の壯齡に於てあつた、彼は多くの巡禮者の群れに投じて「ピラトの階段」を膝を以て登りつゝあつた、此階段はもとピラトの政廳にありしものにて、イエスの昇りし事あるものと傳へられてゐる（勿論事實ではない）、故に此階段を聖なるものとして巡禮者が敬虔なる姿態を以て登ることになつて居たのである、中途にして彼の心に浮びしは羅馬書一章十七、十八節であつた、殊に「義人は信仰によりて生くべし」の句であつた、電撃の如く此句が彼の魂を撃つた、彼は中途より階段を引き返した、彼の心は此時羅馬教と絶縁したのである、彼は多くの失望を以て郷國に歸つた、しかし新しき生命は此失望の中より發芽し始めたのである、かくてプロテスタント教は起り、かくて自由は全土に漲るに至つた、彼によりて起りたる宗教改革は決して單なる宗教の改革ではなかつた、又舊教に對抗して新教が起つたと云ふだけの事ではなかつた、實にかの宗教改革は當時の世界たる歐洲全土の大改造であつた、げに基督教の生起を別として、宗教改革が與へたほどの大改造は嘗て此世に起らなかつた、羅馬書が——殊に其の一章十八節が——斯の如き大改造の因となつたのである、不思議である、しかし事實である。

第二に注意すべきは第三章二十一—二十六節である、これ羅馬書の中心である、殊に其中の二十三—二十五節を我等は見やう。

凡ての人罪を犯したれば神の榮光を受くるに足らず、^{いさほし} けなくして神の恩恵によりキリストイエスにある贖罪によりて義とせらるゝなり、即ち神は忍耐を以て過來し方の罪を見遁し給ひしが、己の義を顯はさんとて、キリストを立て、其血によりて信仰によれる宥の供物となし給へり。（改譯）^{あがなひ}
^{すげこ}

寔に人の救はるゝは行に由らず信仰に由る、功なくして唯キリストを信ずる信仰のみに由りて、神の恩恵を受けて義とせらる、これイエスの十字架の贖罪あるがためである、人はたゞイエスを信ずるに由りて罪を赦され潔めらる、唯一の救の道は信仰であると、此人を救ひ、國を救ひ、世界を救ふ救済の大原理である、もし約百記十九章二十五節が約百記の中心であり且舊約聖書の中心であるならば、羅馬書三章二十五節は羅馬書の中心たるに止まらずして又實に新約聖書の中心であるのである。

古來此語によりて靈魂の平安を得たる人は其數無限であると思ふ、英の詩人ウィリヤム・クウパーの如きは其代表者である。

それはクウパーが絶望の底まで落ちこんだ時であつた、彼は甚しく興奮して居室を右に左に歩みつゝあつた、遂に彼は窓際に腰を卸した、其處に聖書があつたので、何かの慰めと力を見出し得るかも知れぬと思つて其れを開いた、彼は言ふてゐる「私の眼に觸れた箇所は羅馬書第三章の第二十五節であつた、義の太陽の光はこよなき豊けさを以て私を照した、私はキリストが私の赦免と全く義とせらるゝ事とのために爲せし贖ひの完全充足なるを知つた、一瞬にして私はこれを信じそして福音の平和を受けた」と、彼は尚ほ言ふ「もし全能者の腕が私を支へなかつたならば私は感謝と歡喜のために壓倒されて了つた事であらう、私の眼は涙に充ち感極まつて聲は出なかつた、私は愛と驚異に漲り溢れて唯靜かなる敬畏を以て天を見上げ得るのみであつた」と、「其歡喜は言ひ難く且榮光あり」(ペテロ前書一の八)とは正に斯の如き聖靈の働きを云ふのである。

(テエラー氏著クウパー傳より)

げに三章二十五節の如きは聖書の中心たる著るしき語である、聖書は羅馬書に照して見る時完全に理解し得るとカルヴィンは言ふた、我等は寧ろ進んで言はう、羅馬書三章二十五節に照して創世記の始より默示録の終まで眞に解し得るのであると、眞に偉大なる言である。

第三に我らは第十三章十一節―十四節を擧げ度い、（讀者は聖書を開きて此箇處を讀まれ度し）、こは再臨の希望に根ざす強き新生活の勧めである、此語に勵まされて新生涯に入つた人の數は無限であると思ふ、かの羅馬教會の最大偉人、聖オーガスチンの如きは其好き實例である、彼は如何にかして信仰生活に入らんと努めつゝあつたが、心に荒れ狂ふ情欲は空しく彼の努力を嘲笑つて居た、併し期は遂に來た、聖靈は彼の切なる願いを納れた、彼は一日懊惱に重き胸を抑へて庭園を歩みつゝあつた、時に何處よりともなく細く妙なる聲が彼の耳を打つた、其聲は明かに「聖書を開け」と聞えた、天使の聲か聖靈の囁きか、孰れにしても此世の人の聲ではなかつた、彼は直ちに聖書を開いた、其處は恰も羅馬書十三章の終りであつた、彼は燃ゆる眼を以て十一節以下を一氣に讀み下した、茲に強烈なる決心は自らにして彼に起つた、茲に「舊きは去つて皆新しくな」つた、其熱烈なる信仰の叫びと廣博なる思想とを以て世界に大感化を與へし聖オーガスチン、彼は斯くして生れたのであつた、羅馬書十三章末段はオーガスチンを通して全世界に大感化を與へたのである。

その他十八世紀に於て世界に強き靈的復活を與へたるジョン・ウェスレーの如きは、ルウテルの羅馬書註解の序文を讀みて信仰に入れりと傳へらる、即ち羅馬書がルーテルを通してウェスレーを生んだのである、以上の如く世界を改造せし大偉人を幾度も起したる羅馬書は、即ち世界を改造せし書と云ふべきである、先づ人をその根柢に

於て改造し以て世界の改造を促すものは此書である、これ今日までの歴史の證明する所である。

余自身また此書に依つて救はれし一人である、儒教國に育ちし我等は基督教を以て聖人君子たるの道と考へ、完全なる道德的狀態に達せん事を信仰の目的と考へ易い、然る時己の實狀が己の理想と副はざるため苦悶懊惱の襲ふ所となるのである、余の如きは此罪の悶えに泣きしも日本國に於て之を解決するの道なく、ために遙々米國にまで渡りて此疑團の氷解を求めたのである、時に深切なる先生あり余に教へて曰く「汝自ら義たらんと努る勿れ、それは恰も小兒が植木を鉢に植えて毎日引き抜きつゝ發育如何を調査する類にして、到底でき得べき事にあらざ、汝自ら聖くならんと努めずして唯十字架のイエスを仰げ、然らば平安汝に臨まん」と、かく教へられて大に悟る所あり、且羅馬書を精讀して遂に平安に達したのである、仰ぎ瞻よさらば救はれんと、これ羅馬書の提示する平安獲得の道である、自ら義となりて平安に達せんとするは福音とは正反對の道である、福音は唯一つ即ち信仰によりて神に義とせられて平安に入るのである、我等の研究せんとする羅馬書は此道を人に教ふる書である。

最後に羅馬書の骨子を述べよう、一章一節―十五節は前置であり、十五章十四節以下第十六章までは結尾の挨拶の類である故これを除きて、一章十六節より十五章十三節までを羅馬書の本體とする、これは左の三綱目に分たれる。

一、人は如何にして救はるゝかの問題（一章十六節―八章）

二、人類は如何にして救はるゝかの問題（九章―十一章）

三、此救に與りし者の生活の問題（信者の實踐道德）（十二章―十五章十三節）

右の中第一が最も大切であつて、これ羅馬書の主要部である、そして之を左の三項に分つことが出来る。

一、義とせらるゝ事（一章十六節—五章）

二、聖めらるゝ事（六章、七章）

三、榮化せらるゝ事（八章）

この三つ、即ち義とせらるゝ事、聖めらるゝ事、榮化せらるゝ事は孰れも自己の努力に依らず唯信仰による仰瞻ぎやうたんに依つて與へられる、之を細説すれば十字架のキリストを仰ぎ瞻る事に由て義とせられ、復活せるキリストを仰ぎ瞻る事によつて聖められ、再臨すべき彼を仰ぎ瞻る事によつて榮化せられる、一として自己の功、行、積善、努力によつて達成せらるゝものはない、凡て凡て彼を信ずる信仰に由り、彼の遂げ給ひし功に由り、たゞ偏に彼を信受し、彼に信賴し、彼を仰ぎ瞻る事に由りて我等は義とせられ、又聖められ、また榮化せしめらる、此事を教ふるが羅馬書の主要なる目的にして、それに添えて人類の救拯と基督者の實踐道德とを説示するのである、簡単にして明瞭、解し易きが如くにして而も解し難く、解し難きが如くにして而も解しや易きが羅馬書である、げに此偉大なる書は我等の熱心なる研究に値するものである、そは其論ずる所が世界人類の最大問題であるからである。

キリスト教の聖典は、言うまでもなく新約聖書である。もちろん旧約聖書も加えて、創世記から黙示録に至るまで、神の道は完全に啓示された。したがって、キリスト教信者が依拠すべき聖典は旧新約両書である。しかし、厳密な意味でキリスト教の聖典というべきは、新約聖書である。なぜなら、キリスト教そのものが、その完成された形においてはキリストの出現によって始まったものであるからだ。この新約聖書は、その分量においては決して大著述と称されるものではない。五号活字で四六判に組んでも、わずか数百ページに過ぎない。これを仏教の聖典である大蔵経と比べると、その分量においては小屋と大邸宅を比べるに等しい。また、イスラム教の聖典であるクルアーンと比べても、その半分にも満たない。その大きさからすれば、まさに小さな書物である。しかし、この小さな書物の中に、全世界を幾度も変革した歴史を持ち、将来もそうする力を持った一書が含まれているのは、まさに奇跡の中の奇跡と言わねばならない。この一書こそ、まさに我々の今回の研究テーマであるローマ書である。

聖書は実に宝の蔵である。その中には、我々の心の糧とすべきものが限りなくある。したがって、我々は研究すべきテーマが少ないことに悩むのではなく、むしろ多すぎることに悩んでいる。しかしながら、福音の中心である十字架、すなわち贖罪問題について研究しようとする時、この問題に関して徹底的な説明を提供したローマ書採るのが最上の道であることは言うまでもない。

イエスは、その公生涯の終わりに、自らの死を弟子たちに預言された。マタイ伝第十六章二十一節には、「その時からイエスは、エルサレムに行つて、長老たち、祭司長たち、律法学者たちから多くの苦しみを受け、殺され、三日目によりみがえらなければならないことを、弟子たちに示し始められた」とある。これは最後のガリラヤ巡回中の出来事であった。それを引き止めようとしたペテロは「サタン」と呼ばれて退けられた。主は揺るぎない決意をもって自ら死を選ばれたのである。何の故の死であろうか。なぜ彼は、できるだけ長く地上に留まり、人々を救う聖業に従事しようとしなのか。実に不思議なことである。イエスはガリラヤでこのことを繰り返し弟子たちに語つたとみえ、十七章二十二、二十三節も同じことを記している。彼はエルサレムへ上る途中で再びこのことを彼らに告げた（二十章十七、十九）。そして、ここで初めて自らの死の決意の意味を語つた。「人の子が、仕えられるためではなく仕えるために、また多くの人のための贖いの代価として、自分のいのちを与えるために来たのである。」（二十章二十八）と。そして、弟子たちと最後の過越祭を守つた時に、「あなたがたは皆、この杯から飲め。これは、罪が赦されるように、多くの人のために流される、わたしの契約の血である」と告げられた。やはり、彼の死の決意は、全ての人々の罪を自分一身に背負ひ、彼らの代わりに自分の命を与えてその贖いとなり、彼らの罪の赦しを得ようとすることにあつた。これこそ、彼の永遠に人類全体を包む大いなる愛の発動であつた。

イエスは、その言葉を果たして十字架上でその盛んな生命を捧げた。弟子たちは失望と恐怖で逃げ去つた。しかし、イエスは墓と死に閉じ込められる者ではなかつた。父は彼を復活させ、そして昇天させた。ここに於いて、

弟子たちの間に力強い信仰がにわかに起こった。彼らは主の生前の教えを思い出し、それと照らし合わせて、その十字架と復活を眺めた。こうして、彼らはまずイエスの神性をはっきりと信じた。それに合わせて十字架の贖罪を信じ、さらに主の再臨を信じた。かくしてキリスト教は成立し、かくしてその世界的伝道は開始された。

我々が概してイエスの贖罪の死の予言と、自身の罪の赦免への切なる望みをもって十字架を見る時、贖罪の信仰は生まれる。十二使徒たちはそうであった。しかし、彼らは単純で実直な人々であって、理論の上でその信仰を説明しようとは試みなかった。ここに神は、敵の中から使徒パウロを興された。彼は、痛切な罪の赦しの体験と、深遠な贖罪の理論を兼ね備えた人物であった。おそらく彼はこのことについて、父の黙示に接しようと、何年も荒野をさまよったことであろう。ついに彼は、血と涙をもって贖罪の体験と、その理論の両方を手に入れた。父は彼にこれを示し、彼はイエスの十字架に理論的な根拠を与えた。ローマ書は、すなわち贖罪の理論的根拠を明らかにした大著である。

再臨は尊い希望である。しかし、十字架を抜きにした再臨の希望は、害が多くて益が少ない。人は十字架を信じなければ、あるいは十字架について浅い信仰にとどまる限り、再臨を信じてても健全であることはできない。実際にキリスト教の特色は、再臨に存在するのではなく、十字架に存在する。もちろん、キリスト教の再臨、およびそれに伴う世の終末と変革の内的性質が、他の宗教のそれと似たものと比較して、全く比較できないほど高いところにあるのは事実である。とはいえ、そのことは、他の宗教にもこれに似た教義が存在することを否定できない。例えば、大本教のようなものは、いわゆる終末教であって、近い将来における世界の崩壊と変革を主張す

るものである。したがって、我々の再臨唱道が、しばしばそのような宗教を信じる人々の共感と賛同を得て、キリスト教への浅い見方を引き起こしたのは遺憾なことである。再臨の希望は、贖罪の土台の上に築かれて初めて健全なものである。後者を除いた前者は、砂の上に建てられた家のようなものである。雨が降り、大水が出て、風が吹いてその家を打てば、ついに倒れて、その倒壊は大きい。いや、雨が降らず風が吹かなくても、その家は倒れ去るのである。

キリスト教の専有的な教義は贖罪である。もちろん、罪の赦しは仏教にもある。浄土真宗のようなものは、これを命としている宗教である。とはいえ、彼らになく、我々にあるものは、まさにキリストの十字架である。どのような宗教が、その教祖の死の上に罪の赦しの信仰を立脚させるものがあるだろうか。ただの罪の赦しの信仰ではない。まさにイエス・キリストの贖罪による罪の赦しの信仰である。これこそキリスト教の特有のものである。福音の福音たるゆえんは、まさにここにある。したがって、今日この信仰を提唱することは、キリスト教を他の宗教と截然と区別させる効果があるとともに、近頃唱道される贖罪抜きキリスト教と、我々が信じるキリスト教との相違を明らかにする、最も有力な道である。この意味において、ローマ書の研究は非常に価値があると言わねばならない。

人はしばしばローマ書を難解な書物とし、この意味で新約聖書中、これを黙示録と並置する。黙示録は記述そのものが不可解であり、ローマ書は、その中に尊い言葉は散見されるものの、全体として解しがたいと言われている。果たしてこの書は、それほど難解なものなのだろうか。まず注意すべきは、その分量が非常に少ないこと

である。章に分けると十六、節に分けると四百三十三、字数はギリシャ語の原文では約七千字、英語訳では約八千字、日本語訳では約一万六千字（仮名を一字として数えて）である。これを『聖書之研究』誌上に印刷すれば、わずかに二十ページで足りるのである。また、これを読み通すには四十分で足りると思う。到底一時間を超えることはないだろう。幾度も世界を変革した書と称されるも、その分量の小ささは実に驚くべきである。したがって、これを難解だとするも、その小冊子であることを思えば、これを研究しようという勇氣は、自ずと湧き起こらざるを得ない。もしこの書を一つの要塞に例えるなら、もとより堅固な砦であることには違いないが、決して難攻不落と言わなければならないものではあるまい。攻めるに道をもつてすれば、この堅固な砦もまた陥落するのである。要は我々の熱心さにある。そして、この要塞が堅固であつても、必ずしも大きくないことは、これを攻略しようとする我々にとって、思いがけない幸運である。記しておこう。十六章、四百三十三節、一万六千字。難しくとも、わずか一万六千字からなる一つの文章に過ぎない。

古来、貴重な書物は、ただ読むだけでなく、筆写することで理解を助けるのが最良の方法とされている。我々の祖先に仏教に熱心な信者が多かったことは周知の事実であるが、彼らが熱心に經文を筆写したことは、現代人が到底及ばないことである。法華經を全部筆写した人のような者は、数えきれないほど多数であつたと思う。あの宗教改革において、尊く重い責任を果たしたメランヒトン、ローマ書を二回筆写したとのことだが、それが西洋では珍しいこととして伝えられている。しかし、これを日本の仏教史に持ち来れば、少しも珍しいことではなく、全く普通のことである。ローマ書のような貴重で、かつ平易ではない書は、当然筆写すべきである。そう

すれば、ただ通読するのに比べて、理解の上に、おそらく十倍もの力を与えることであろう。

英国の詩人であり、また文学批評の天才であったコールリッジは、ローマ書を称して「世界最大の書」と呼んだ。本当に人間の筆になったものの中で、これほどの大著作はないのである。この書があったために、地球の表面は幾度も変革されたのである。もしこの書がなかったらどうなっていたか。我々は果たして今見るような世界を見ることができだろうか。この書のために引き起こされた幾度かの世界変革がなかったとしたら、我々はまだ、魂が束縛された暗い境地で呻吟していることであろう。アウグスティヌスのローマ教会がなく、ルターのプロテスタント教がなく、クロムウェルの清教徒改革がなく、ワシントンの米国建設がない時、世界は今、果たしてどのような状態にあるだろうか。我々は今、その様子を想像することすらできない。しかし、おそらく今日に比べて、遥かに悪い世界に我々は住むに違いないと思う。

今や世界変革の声は、地の果てから果てまで鳴り響いている。変革は、人間生活の各方面に向かって叫ばれつつある。しかしながら、今日の変革説は、いまだ一度も実際に試みられていないものであり、したがって、そのどよめきがどれほど大きくても、その効能が明らかでないことは否定できない。しかし、ローマ書が提示する変革の原理は、かつて幾度も試みられ、その効果が顕著であることが証明されているものである。しかも、今日流行の変革説は、ただ社会の外部的な制度に関することであるが、ローマ書の変革説は、自己の魂の変革を主眼とするものである。そして、外の変革と内の変革と、どちらが源で、どちらが末であるかは、識者を待たずして明らかである。したがって、ローマ書が提供する変革の原理は、今日流行のそれに比べて、遥かに深遠なものであ

ることは言うまでもない。外か内か、形か心か、肉か霊か。我々は前者の一つを、後者の一つよりも重んじなければならぬ。そして古来、人の道は概して外と形と肉に重きを置き、神の道は常に内と心と霊に重きを置く。そして、ローマ書の変革説は神の道である。したがって、今日流行の人の道である幾多の変革説と正反對の極に立っている。しかしながら、問題はどちらが真正な変革説であるかに存するのである。本当にそうである。

今、ローマ書の中から二、三の有名な言葉を抜き出して、それが右のような意味における変革の原理であることを示すことにしよう。第一は、一章十六、十七節である。

「わたしは福音を恥としない。それは、ユダヤ人をはじめ、ギリシア人にも、すべて信じる者を救う神の力である。福音には神の義が啓示されて、信仰から信仰へと導かれる。『義人は信仰によって生きる』と記されているとおりである」とあるが如し。

これは、多くの注解者によってローマ書の主題と見なされる重要な言葉であって、ローマ書全体を凝縮したかのようなものである。時は一五一一年の某月某日のことであつた。あの北欧の剛健な男、マルティン・ルターは、その属する宗派の使命を帯びてローマ市に使節として赴いた。当時彼は三十歳の壮年であつた。彼は多くの巡礼者の群れに加わって、「ピラトの階段」を膝で登りつつあつた。この階段はもとピラトの政庁にあつたもので、イエスが昇つたことがあると伝えられている（もちろん事実ではない）。したがって、この階段を聖なるものとして、巡礼者が敬虔な姿で登ることになっていたのである。途中、彼の心に浮かんでは、ローマ書一章十七、十八節であつた。特に「義人は信仰によって生きる」の句であつた。電撃のようにこの句が彼の魂を打った。彼は途中で

ら階段を引き返した。彼の心は、この時ローマ教会と決別したのである。彼は多くの失望を抱えて故郷に帰った。しかし、新しい生命は、この失望の中から芽生え始めたのである。こうしてプロテスタント教が起こり、こうして自由が全土に満ち溢れるに至った。彼によって起こされた宗教改革は、決して単なる宗教の改革ではなかった。また、旧教に対抗して新教が起こったというだけの出来事ではなかった。本来にあの宗教改革は、当時の世界であるヨーロッパ全土の大変革であった。確かにキリスト教の成立を別として、宗教改革が与えたほどの大変革は、かつてこの世に起こらなかった。ローマ書が、特にその一章十八節が、このような大変革の原因となったのである。不思議であるが、事実である。

第二に注意すべきは、三章二十一―二十六節である。これこそローマ書の中核である。特にその中の二十三―二十五節を我々は見よう。

「すべての人は罪を犯して、神の栄光を受けるに足りない。ただキリスト・イエスにある贖罪によって、功なくして神の恵みにより義とされる。すなわち、神は忍耐をもって過去の罪を見過ごされたが、ご自身の義を現そうと、キリストを立て、その血による信仰による宥めの供物とされた」(改訳)

本当に人が救われるのは行いによるのではなく、信仰による。功なくしてただキリストを信じる信仰のみによって、神の恵みを受けて義とされる。これはイエスの十字架の贖罪があるためである。人はただイエスを信じることによって罪を赦され、清められる。唯一の救いの道は信仰であると。これこそ、人を救い、国を救い、世界を救う救済の大原理である。もしヨブ記十九章二十五節がヨブ記の中心であり、かつ旧約聖書の中心であるなら

ば、ローマ書三章二十五節はローマ書の中心にとどまらず、また実に新約聖書の中心である。

古来、この言葉によつて心の平安を得た人は、その数限りないと思う。英国の詩人ウィリアム・クーパーのよ
うな者は、その代表者である。

それはクーパーが絶望の底まで落ち込んだ時であつた。彼はひどく興奮して居室を右に左に歩みつゝあつた。
ついに彼は窓際に腰を下ろした。そこに聖書があつたので、何かの慰めと力を見出せるかもしれないと思つ
て、それを開いた。彼は言っている。「私の目に触れた箇所はローマ書三章二十五節であつた。義の太陽の光
は、この上ない豊かさをもつて私を照らした。私はキリストが私の赦免と全く義とされることのために為さ
れた贖いの、完全にして十分なものであることを知つた。一瞬にして私はこれを信じ、そして福音の平和を
受けた」と。彼はさらに言う。「もし全能者の腕が私を支えなかつたならば、私は感謝と歓喜のために圧倒さ
れてしまったことであらう。私の目は涙に満ち、感極まつて声は出なかつた。私は愛と驚異に満ち溢れて、
ただ静かなる畏敬をもつて天を見上げるのみであつた」と。「その喜びは言い尽くしがたく、かつ栄光に満
ちている」(ペテロ前書一章八)とは、まさにこのような聖霊の働きを言うのである。(テラー氏著クーパー
伝より)

本当に三章二十五節のような言葉は、聖書の中核をなす著しい言葉である。「聖書はローマ書に照らして見る時、
完全に理解し得る」とカルヴァンは言つた。我々はむしろ一歩進んで言おう。ローマ書三章二十五節に照らして、
創世記の始まりから黙示録の終わりまで、真に理解し得るのであると。真に偉大な言葉である。

第三に、我々は十三章十一―十四節を挙げたい。(読者は聖書を開いてこの箇所を読んでほしい)。これは再臨の希望に根差す、力強い新生活への勧めである。この言葉に励まされて新しい生涯に入った人の数は無限であると思う。あのローマ教会の最大の偉人、聖アウグスティヌスのような者は、その良い実例である。彼は何とかして信仰生活に入ろうと努力しつつあったが、心に荒れ狂う情欲は、むなしく彼の努力を嘲笑っていた。しかし、時はついに来た。聖霊は彼の切なる願いを受け入れた。彼はある日、苦悩で重い胸を押さえ、庭園を歩みつつあった。その時、どこからともなく、細く妙なる声が彼の耳を打った。その声は明らかに「聖書を開け」と聞こえた。天使の声か、聖霊の囁きか。いずれにしても、この世の人の声ではなかった。彼は直ちに聖書を開いた。そこはちょうどローマ書十三章の終わりであった。彼は燃えるような目で十一節以下を一気に読み下した。ここに強烈な決心は自然に彼に起こった。ここに「古いものは去って、すべて新しくなった」。その熱烈な信仰の叫びと、広範な思想とをもって世界に大きな影響を与えた聖アウグスティヌス。彼はこうして生まれたのであった。ローマ書十三章の終わりは、アウグスティヌスを通して全世界に大きな影響を与えたのである。

その他、十八世紀において世界に強い霊的復活を与えたジョン・ウェスレーのような者は、ルターのローマ書注解の序文を読んで信仰に入ったと伝えられている。すなわち、ローマ書がルターを通してウェスレーを生んだのである。以上のように、世界を変革した大偉人を幾度も起こしたローマ書は、すなわち世界を変革した書と云うべきである。まず人をその根底において変革し、それをもって世界の変革を促すものは、この書である。これは今日までの歴史が証明するところである。

私自身もまた、この書によって救われた一人である。儒教の国に育った我々は、キリスト教を聖人君子たる道と考え、完全な道徳的狀態に達することを信仰の目的と考えがちである。そのような時、自分の実状が自分の理想に合わないため、苦悶と懊悩に襲われるのである。私のような者は、この罪の苦しみに泣きもしたが、日本国内でこれを解決する道がなく、そのために遙々米国にまで渡って、この疑問の氷解を求めたのである。当時、親切な先生がいて私に教えてくれた。「あなたは自ら義であろうと努めてはいけない。それは、ちょうど子供が植木を鉢に植えて、毎日引き抜いては発育具合を調べるようなもので、到底できることではない。あなたは自ら聖くなろうと努めずに、ただ十字架のイエスを仰ぎなさい。そうすれば平安があなたに臨むだろう」と。このように教えられて大いに悟るところがあり、またローマ書を精読して、ついに平安に達したのである。「仰ぎ見よ、そうすれば救われる」と。これがローマ書が提示する平安を得る道である。自ら義となつて平安に達しようとするのは、福音とは正反對の道である。福音はただ一つ、すなわち信仰によって神に義とされて、平安に入るのである。我々が研究しようとするローマ書は、この道を人に教える書である。

最後にローマ書の骨子を述べよう。一章一節から十五節は前置きであり、十五章十四節以下十六章までは結びの挨拶の類であるので、これを除いて、一章十六節から十五章十三節までをローマ書の本質とする。これは次の三つの項目に分けられる。

人はどうやって救われるかの問題（一章十六節～八章）

人類はどうやって救われるかの問題（九章～十一章）

この救いに与った者の生活の問題（信者の実践道徳）（十二章～十五章十三節）

右の中、第一が最も大切であつて、これこそローマ書の主要部である。そして、これを次の三つに分けることができる。

義とされること（一章十六節～五章）

聖められること（六章、七章）

栄化されること（八章）

この三つ、すなわち、義とされること、聖められること、栄化されることは、いずれも自己の努力によらず、ただ信仰による仰ぎ見ることによつて与えられる。これを詳しく説明すれば、十字架のキリストを仰ぎ見ることによつて義とされ、復活したキリストを仰ぎ見ることによつて聖められ、再臨すべき彼を仰ぎ見ることによつて栄化される。一つとして自己の功績、行い、積善、努力によつて達成されるものはない。すべてすべて、彼を信じる信仰により、彼の成し遂げられた功績により、ただひたすらに彼を信じ受け、彼に信頼し、彼を仰ぎ見ることによつて、我々は義とされ、また聖められ、また栄化させられる。このことを教えるのが、ローマ書の主要な目的であり、それに加えて、人類の救済とキリスト者の実践道徳を説き示しているのである。単純にして明瞭、解しやすいように解しがたく、解しがたいように解しやすのがローマ書である。本当にこの偉大な書は、我々の熱心な研究に値するものである。それは、その論ずるところが、世界人類の最大の問題であるからだ。